

ゴウハル・アーイーンの生涯

清 水 宏 祐

はじめに

493年ラジャブ月/1100年5月、一人のアミールが没した。その名をゴウハル・アーイーン (Gauhar・Ā'in), ラカブをサアド・アルダウラ (Sa'd al-Dawla) といった⁽¹⁾。7人の主人に仕えた数奇な一生であった。しかも、主人のうちの4人までがセルジューク朝の君主であったという。セルジューク朝関係史料のいくつかには、彼の人物についての記述がある。イブン・アルジャウズィーは彼の一生を回顧して、その洞察力、能力、軍隊を承服させる力についての賛辞を書きつらねている。イブン・アルジャウズィーは同時に、彼の敬虔さ、高潔さ、公正さにも称賛の言葉を惜しまない⁽²⁾。

イブン・アルアスィールも彼を評して、徳の高さを「自らの領地 (wilāya) の人々 (ahl) からは、何一つ私しようとはしなかった」と讃えている⁽³⁾。

一方、これとは正反対の評価もあった。ブンダーリーは、彼を評して、こういう。

「シャフナのゴウハル・アーイーンは、犬のごとく狡猾であり、畜生で、冷血漢であり、陽物のない男であり、女陰のない女である」と⁽⁴⁾。

ゴウハル・アーイーンとは、ペルシア語で「宝石の鏡」という意味である。この名のように、彼の生涯も華麗なものであったのだろうか。両極端の評価が与えられている彼の人物像は、一体どのよう

なものだったのだろうか。

セルジューク朝のアミールをめぐることは、何人かについて簡単な考察がなされているが、ゴウハル・アーイーンに關しての專論は著されてはいないようである⁽⁵⁾。本稿では、彼の出身から死にいたるまでの人生を、年代順に、史料に即して追ってみることにしよう。一人のアミールのライフヒストリーのなかに、セルジューク朝の支配体制のもつ、さまざまな問題が集約されていると考えられるからである。

本稿で使用する史料、およびその略号は以下のとおりである。

- I. A. Ibn al-Athīr. *al-Kāmil fī al-Ta'rikh*. 12vols. Ed. C.J. Tornberg. Leiden, 1863. reprint. Bayrūt, 1965-66, *al-Fahāris*. Bayrūt, 1967.
- I. J. Ibn al-Jawzī. *al-Muntazam fī al-Ta'rikh al-Mulūk wa al-Umam*. 17vols. Ed. Muḥammad 'Abd al-Qādir 'Aṭṭār and Muṣṭafā 'Abd al-Qādir 'Aṭṭār. Bayrūt, 1992.
- Bundārī. Bundārī. *Zubda al-Nuṣra wa Nuḥba al-Uṣra*. al-Qāhira, 1318H.
- Akhbār. al-Ḥusaynī. *Akhbār al-Dawla al-Saljūqīya*. Ed. M. Iqbāl. Lāhūr, 1933.
- Mir'āt. Sibṭ ibn al-Jawzī. *Mir'āt al-Zamān fī Ta'rikh al-A'yān*. Ed. Ali Sevim. Ankara, 1968.
- Bayhaqī. Bayhaqī. *Ta'rikh-i Bayhaqī*. Ed. 'A.A. Fayyād. Mashhad, 1350kh.
- Rāwandī. Rāwandī. *Rāḥat al-Ṣudūr wa Āyat al-Surūr*. Ed. M. Iqbāl. London, 1921.
- Saljūq-nāma. Zahīr al-Dīn al-Naysābūrī. *Saljūq-nāma*. Tehrān, 1332kh.

出身・経歴

イブン・アルアスィールによれば、フーズィスターシのクルクーブ (Qurqūb) なる婦人のもとに仕えていたというのが、ゴウハル・アーイーンの確認できる最初の経歴である。次に彼は、ブワイフ朝の君主、アブー・カーリジャールのハーディムとなったという。アブー・カーリジャールがバグダードにきたとき (436/1044年) に、彼を伴っていたという。ブワイフ朝政権の崩壊に際し、セルジューク朝のトグリル・ベクは、アブー・カーリジャールの息子で次の大アミールとなっていたマリク・アルラヒームを、レイ近郊のタバラク (Tabarak) の山城 (qal'a) に幽閉した。この時、ゴウハル・アーイーンもマリク・アルラヒームと行動をとともにした。マリク・アルラヒームが死ぬと (450/1058年)、彼はセルジューク朝のアルプ・アルスラーンのもとに仕えることとなったのだという⁽⁶⁾。

一方、イブン・アルジャウズィーは彼の出自を、アブー・カーリジャールの所有していた (malaka) トルコ人のハーディムの一人であるとして、彼がトルコ系のマムルークであったことを示している⁽⁷⁾。

イブン・アルジャウズィーも彼が女主人に仕えて身の回りの世話をしていた、と述べている点から見て、ブワイフ朝の君主に引き取られる以前に、ゴウハル・アーイーンはすでに去勢された「宦官」としてのハーディムであったものと考えられる。一般人とは異なる名前も、彼がハーディムであったことを考えれば、さほど異とするにはあたらない。前述のブンダーリーの評価は、まさにハーディムとしての彼の身体的な特徴を、性格面にまで押し広げて、侮蔑的な言葉としたものであろう。

同時に、彼がアブー・カーリジャールに仕える以前、早い段階から軍隊の統率能力にすぐれていたことは、イブン・アルジャウズィーの記述からもうかがえるところである⁽⁸⁾。

これとは別に、バイハキーには、ガズナ朝のハズィーネダールを勤めていたゴウハル・アーイーンなるものの名が見えている。セル

ジューク朝のアミールのなかには、ガズナ朝に仕えていたものもあった。しかし、バイハキーが伝えている人物は、その活躍した年代(421-431/1030-1040年)から見て、別人であることは明らかであろう⁽⁹⁾。

マラーズギルドの合戦

セルジューク朝の時代に、彼の名が最初に記録に見えるのは、マラーズギルドの合戦においてである。463年ラジャブ月/1071年8月に起こったこの戦いにおいて、ゴウハル・アーイーンは、最大の戦功を挙げたアミールであった。彼のマムルークが、ビザンツ皇帝ロマノス・ディオゲネスを捕虜にしたからである。

事件の細部は史料によって異なっている。いささか長くなるが、ここに紹介してみることにしよう。まずスイフト・ブン・アルジャウズィーによれば、以下の如くである。

スルターン、アルプ・アルスラーンの陣営に、ゴウハル・アーイーンがやってきて、「私めのグラームの一人が、ビザンツ皇帝を捕虜にしたといっております。このマムルークは、全軍とともにニザーム・アルムルクが査閲したものでしたが、宰相は、『このマムルークは、まだ小さいので、ビザンツ皇帝を捕らえたら、連れてこい』とおっしゃって、おからかいになりました。偉大なるアッラーが、このマムルークの手で皇帝を捕らえるよう、お計りになったのです」と報告した。スルターンは、これを信じないで、かつてビザンツに使節として行ったことのあるシャーズィーという名のハーディムを呼び寄せて捕虜が皇帝であることを確認した。次に、グラームを呼んで、いきさつを訊ねた……アルプ・アルスラーンは、そのマムルークにヒルアを与え、親衛隊(khawwāṣṣ)に加えた⁽¹⁰⁾……。

これに対して、イブン・アルジャウズィーは、やや簡略な記述ながら、ほぼ同様の内容を伝えている。ただし、ゴウハル・アーイーン

をハーディムと呼んで、当時の彼がハーディムの地位にあったことを示している。イブン・アルジャウズィーはまた、皇帝を捕らえたグラームを、スルターンはハージブとした、と記している⁽¹¹⁾。

イブン・アルアスィールは、さらに簡略な記述でこの事件を伝えるが、ゴウハル・アーイーンが、ニザーム・アルムルクにこのグラームを査閲させようとしたところ、ニザーム・アルムルクが、これを侮辱して拒否した旨を記録している。これは、後にゴウハル・アーイーンと、ニザーム・アルムルクの間に生じた敵対関係の端緒を暗示するものである⁽¹²⁾。

ブンダーリーによれば、ゴウハル・アーイーンとニザーム・アルムルクの関係は、このマムルークをめぐる、さらに陰悪なものであったという。ゴウハル・アーイーンがニザーム・アルムルクに、このマムルークを贈り物としようとしたが、ニザーム・アルムルクは拒否して一顧だにせず、他の史料が述べているような軽蔑的な言辞を弄したのだという⁽¹³⁾。

これに対して、ペルシア語のラーヴァンディーの記述は、異なっている。

合戦に出陣する前にバグダードで、アルプ・アルスラーンは軍隊の査閲を望んだ。そこで、スルターンの御前にいたゴウハル・アーイーンが査閲を行なった。彼の従者 (ḥāshīya) のなかに非常に小さな (sakht ḥaqīr) ギリシア人 (Rūmī) のグラームがいた。査閲官 (‘ārid) は、彼の名を記録しなかった。サアド・アルダウラ (ゴウハル・アーイーン) は、「これがビザンツの皇帝 (malik al-Rūm) を捕らえることもあろう」といって、異議をとнаえるのをやめさせたという⁽¹⁴⁾。

これらの異なる史料から読み取れることは、すでにマラーズギルド戦の前の段階から、ゴウハル・アーイーンはスルターンの側近として重んじられており、軍隊の編成、給与、装備を監督する査閲官よりも上位にあって、出撃前の最後の査閲の総監督にあたっていた

こと。戦いでも極めて重要な役割を果たしたこと、それゆえ君主の
一層の信任を得たことである。

バグダードのシャフナ職就任

次に彼の経歴が記録されているのは、バグダードへのシャフナと
しての着任である。セルジューク朝時代のシャフナ職は、トグリ
ル・ベク時代に、トルコ人のアミール、ブルスク（トルコ語で、狸の
意味）が452年ラビー1月/1060年4月にバグダードのシャフナに任
命されたことにはじまる⁽¹⁵⁾。

アルプ・アルスラーン時代には、464年ラビー1月/1071年12月に、
アイ・テギーン・アルスライマーニー（Āy・Tekīn al-Sulaymānī）が
就任している。ところが、彼の任期は短命に終わった。彼の就任
に、カリフ・アルカーイムが異議を唱えたためである。アイ・テギ
ーンの息子が、カリフのmamlookの一人を殺したことがあった、
というのがカリフが難色を示した理由であったという。アイ・テギ
ーンは、カリフに面会を許されず、結局引きあげざるをえなくなっ
たという⁽¹⁶⁾。

アルプ・アルスラーンとニザーム・アルムルクは、カリフからの
罷免要求によってアイ・テギーンを解任し、かわりにゴウハル・ア
ーイーンをバグダードのシャフナ職に付けることに決定した。ゴウ
ハル・アーイーンが同年ラビー2月/1072年1月に着任すると、今
度は人々は出迎え、カリフも彼を謁見したという⁽¹⁷⁾。

ゴウハル・アーイーンには、着任早々、重要な任務があった。カ
リフのワズィール任免に対する介入である。

カリフのワズィール職への圧力行使

ゴウハル・アーイーンのパグダード到着に先だって、カリフ・ア
ルカーイムとアルプ・アルスラーンの間に紛争があった。464年ラビ
ー1月、アルプ・アルスラーンは、カリフの次期ワズィールとして、
アブー・アラールを決定し、彼にスルターンのヒルアを授与し、大ワ
ズィール（wazīr al-wuzarā'）の称号を与えて、バグダードに派遣

した。しかし、カリフがこれに難色を示したため、アブー・アラーは去らざるをえなくなったという。アイ・テギーンの着任の時と同じことが起こったわけである。

カリフの反発の原因は、ことが彼の意向を無視してニザーム・アルムルクの筋書きによってはこばれたこと、カリフのワズィール、イブン・ジャヒールのイクターの半分をアブー・アラーに授与するというタウキエをスルターンが発していたためであった。また、これより前460年ズー・アルカアダ月/1068年9月に、カリフは彼のワズィール、ファフル・アルダウラ・イブン・ジャヒールを解任していた。その理由は、イブン・ジャヒールが、許可なくアルプ・アルスラーンよりヒルアを受けたためであったという⁽¹⁸⁾。

シャフナ職就任とともに、ゴウハル・アーイーンは、スルターンの書簡をもって到着し、早急にこの問題の解決にあたることになったのである。彼は直ちにカリフに謁見を求め、スルターンからの書簡を呈上した。しかし、通常の使者としての口上を述べず、無言のまま来意を紙に書いてカリフに差し出すという演出で、彼に圧力を加えた。カリフも、この脅しに屈して、アブー・アラーのワズィール就任を認めざるをえなくなったという⁽¹⁹⁾。

ゴウハル・アーイーンに着任の事情を見ると、当時のスルターンとカリフの間の権力抗争の構図がよくわかる。このころ、両者の間には、カリフの権限の範囲をめぐる緊張関係があり、介入を強化しようとするスルターンと、実権を保持しようとするカリフとの間で不和が生じていた。シャフナ職とカリフのワズィール職とは、まさにこの力関係の象徴として、両者の駆け引きの的になっていた。カリフのワズィールの任命への介入によって影響力の増大をはかるスルターンは、シャフナのアイ・テギーンの着任拒否という、カリフの抵抗にあいながらも、恫喝外交によって目的を達した。それを直接助けたのがゴウハル・アーイーンである。彼のバグダードへの着任によって、スルターンは、当初の目的を達することになった。この事件から見ても、この時代のシャフナの第一の任務が、カリフの行動をコントロールするためのものであったことは、明らかであ

ろう。ゴウハル・アーイーンの着任後、カリフがスルターンとの連絡を、すべて彼を通して行わざるをえなくなったことが、シャフナの影響力の強さを物語っている。

アルプ・アルスラーンの殺害とゴウハル・アーイーンの負傷

465年ラビー 1 月/1072年11月⁽²⁰⁾、アルプ・アルスラーンは、マー・ワラー・アンナフル遠征の途上で殺害された。この時、ゴウハル・アーイーンもスルターンに同行していた。

アルプ・アルスラーンは、アムダリアを渡るところで、山城(qal'a)を攻略し、その城主を捕虜にした。ホラズム出身のユースフと呼ばれたこの捕虜を、アルプ・アルスラーン自らが処刑しようとした。ところが、ねらった矢が的はずれ、かえってユースフに飛びかかれて、負傷したアルプ・アルスラーンは4日後に一命を落とした、というのが事件のあらましである。この時、ゴウハル・アーイーンは、アルプ・アルスラーンの傍らにいて、彼自身も負傷してしまったという。

この事件の詳細も史料によって異なっている。イブン・アルアスィールによれば、従者(絨毯敷き farrāsh)が鉄の棒でユースフをうち、アトラークが、彼を惨殺してしまったという⁽²¹⁾。また、この従者をアルメニア人であったとするものもある⁽²²⁾。

ラーヴァンディーによれば、ゴウハル・アーイーンが、スルターンの上に身を投げ、身を挺してかばったため、彼も負傷したのだという⁽²³⁾。

史料により細部は異なるが、一致しているのは、ゴウハル・アーイーンがアルプ・アルスラーンの側近としてその身近にあり、捕虜の処刑に立ち会い、彼自身も負傷したことである。これらの記録からも、彼が君主に極めて重んじられる存在であったことが理解されよう。

カーヴルト・ベクの反乱とその処刑

465年シャアバーン月/1073年4-5月、アルプ・アルスラーンの後継者の地位をめぐって、セルジューク族のなかで内紛が起こった。アルプ・アルスラーンの弟、カーヴルト・ベクの反乱である。カーヴルト・ベクと、マリク・シャーの軍隊は、ハマダーン近郊で対戦した。結局この戦いはカーヴルト・ベクの敗北に終わり、カーヴルト・ベクは、村人の手にかかって捕らえられた。この時、カーヴルト・ベクの処刑をマリク・シャーに命じられたのがゴウハル・アーイーンである。

処刑の詳細は、史料によって若干異なっている。イブン・アルアスィールは、ゴウハル・アーイーンが処刑を命じられたことのみを記録しているが⁽²⁴⁾、ブンダーリーは、ゴウハル・アーイーンが懇願したため、実際の処刑にあたったのは、片目のアルメニア人グラームであったとする⁽²⁵⁾。スィプト・ブン・アルジャウズィーは、ゴウハル・アーイーンにかわって、「側近の中の小物たち」(aṣāghir al-ḥawāshī) が行なったとしている⁽²⁶⁾。

実行者が誰であれ、ゴウハル・アーイーンがセルジューク族のなかの重要人物の処刑を命じられたことは、間違いない。血を流すことを忌むため、弓の蔓での絞殺という「名誉ある」刑執行にあたった責任者であったことは、マリク・シャーの彼に対する信任の厚さを物語るものであった。また、一族の処刑を命じられるものは、彼らの中にはおらず、側近のマムルークのみがなしえるものであったともいえよう⁽²⁷⁾。

マリク・シャーの即位とバグダードのフトバでの公示

466年サファル月/1073年10月、ゴウハル・アーイーンは、レイからスルターンの軍隊とともに、再びバグダードに来た。この時の目的は、マリク・シャーのスルターン即位にあたって、カリフからの信任を得ることにあった。次期後継者 (walī 'ahd) のアルムクタディーとともにゴウハル・アーイーンを謁見したアルカーイムは、マ

リク・シャーへのスルターン信任状 ('ahd al-sulṭān Malik · Shāh bi-salṭana)⁽²⁸⁾を手渡し、同時にワズィールが冒頭部分を読み上げ、カリフの旗を手渡した。この儀式の後、カリフは宮殿への人々の出入りを許して、祝意を示したという⁽²⁹⁾。

この時、ゴウハル・アーイーンは、マリク・シャーのもとヘヒルアを届ける使命をもったカリフのワズィール、アミード・アルダウラ・イブン・ジャヒールに同行して、レイに戻っている⁽³⁰⁾。

これより先マリク・シャーは、465年ラジャブ月/1073年3-4月にカリフに書簡を送り、父アルブ・アルスラーンの死を報告し、フトバで自らの名を唱えることを承認するように要求し、カリフもこれを認めていた⁽³¹⁾。

したがって、このケースでは、すでに外交交渉によってマリク・シャーとアルカーイムとの間には合意ができていたことになる。その最終局面の仕上げに、マリク・シャーは、ゴウハル・アーイーンを派遣し、信任状を得るという最も重要な任務を任せたのである。

バグダードの争乱とシャフナによる鎮圧

一方、同465年シャアバーン月/1073年4-5月、バグダードでは、カルフ地区の住民と、バスラ門、カッラーイーン地区の住民との間で騒乱 (fitna) が発生し、殺人、放火事件が多数起こった。これを鎮圧したのが、シャフナである。この時、シャフナは、バスラ門地区、カッラーイーン地区の住民から武器を没収し、彼の郎党たち (アスハーブ) にらばに乗せて運ばせるといふ荒療治を行なったという⁽³²⁾。この時のシャフナの名は記録されていないが、ゴウハル・アーイーンは、前述の対カーヴルト戦参加のため、バグダードには不在であったことは確かである。

また、466年シャアバーン月/1074年4月にも、バグダードではカッラーイーン地区とカルフ地区との間で騒乱事件が発生している。人々がシャフナと彼が任命したものを罵倒しはじめたので、シャフナも、彼らを殺したり、方々に放火するという非常手段にうったえて、これを鎮圧したという⁽³³⁾。この時のシャフナの名も記録され

ていない。

バグダードのシャフナ職への再度の着任

東

マリク・シャー時代になって、ゴウハル・アーイーンは再びバグダードのシャフナに任命された。彼の着任の時期を、いくつかの史料は、471年ムハッラム月/1078年7-8月であるとしている⁽³⁸⁾。

洋
学

この時も、彼のバグダードへの赴任は、カリフのワズィール、ファフル・アルダウラ・イブン・ジャヒール⁽³⁹⁾の罷免問題が絡んでいた。ジャヒール家（バヌー・ジャヒール）は、カリフのもとで、ファフル・アルダウラ、その息子のアミード・アルダウラ、同じくザイーム・アルルアサーの三代にわたってワズィールを勤めた家系であった。

報

事件のきっかけとなったのは、470/1077-1078年にバグダードで起こった騒乱事件である。この時には、スーク・アルマドラサ（sūq al-madrasa）とスーク・アルスラサー（sūq al-thlathā）の人々の間で騒乱が起き、掠奪事件が発生した。ニザーム・アルムルクの息子ムワイッド・アルムルクが当のマドラサの入り口にいて事件を目撃し、アミードとシャフナ双方に使いを送って出馬を要請した。シャフナは軍隊とともに到着して、人々を打ち、双方に死者が生じるといふ事態に発展した⁽³⁴⁾。

この騒乱事件でマドラサが破壊され、その周辺で死者が出る事態となったことを重視したニザーム・アルムルクは、事件の背景にファフル・アルダウラとハンバリー派の人々が介在していたとして、彼の解任を求めたのである。そのため、ゴウハル・アーイーンは、ワズィールの罷免を求めるスルターンからの書簡をもって、「イラクのシャフナ職に復帰させられた⁽³⁵⁾」のである。この記述からすると、これ以前の騒乱事件の解決にあたったシャフナは、別人であるということになる。スィブト・ブン・アルジャウズィーによれば、この時ゴウハル・アーイーンは、イスファハーンから来たといふ⁽³⁶⁾。イスファハーンにいたマリク・シャーとニザーム・アルムルクからの直接の指令を帯びてきたのは当然であるが、「復帰」とい

第七十六卷
二二二

う記述からすると、彼もスルターンのもとに滞在していた可能性がある。

ゴウハル・アーイーンは、ただちにカリフにジャヒール家への苦情を記した書簡を渡し、ファフル・アルダウラの解任を要求した。ブンダーリーによれば、ゴウハル・アーイーンは、ムハッラム月にバグダードのシャフナ職に着任すると、門⁽³⁷⁾の前で3回の礼拝の時に太鼓を打ち鳴らしたという。さらにサファル月（8月）には、酒に酔ってフェルドウス門から入って門を閉め、馬を繋いで、一昼夜（日没前から次の日一日中）以上そこにとどまり、「俺にワズィールを渡す以外に解決策はない。遅延は許されない」と叫んで、再び礼拝の時刻が来るたびに、太鼓を打って罷免を要求しつづけた。この騒ぎに人々は恐慌を来し、荷物を持ち出して避難しようとするものも現われ、騒然たる状態となったという⁽³⁸⁾。結局、スルターンとニザーム・アルムルクに許しを求める内容のタウキーをカリフ・アルカーイムがゴウハル・アーイーンに手渡したため、彼は示威行動を中止して立ち去った。しかし、これだけでは事態は解決せず、結局アミード・アルダウラがイスファハーンにおもむいてニザーム・アルムルクに猶予を求め、彼と和解することで事態は解決を見た。そして翌年には、アミード・アルダウラがカリフのワズィールとなったという⁽³⁹⁾。

この事件は、その内容がゴウハル・アーイーンの最初のバグダードへの着任時に起こったことに類似していることが目を惹く。いずれの場合にも、カリフのワズィール解任の要求を伝えることが、彼の第一の任務であった。しかも、問題は、ワズィール個人の任免にはとどまらなかった。第一回目はカリフに対するスルターンの權威の確立。第二回目は、すでに実権を握っていたニザーム・アルムルクの意向を反映させることが彼に課せられていた。そのため、傍目には非常識と見えるような演出まで行なって、ゴウハル・アーイーンはカリフおよびそのワズィールに対して影響力を行使することに努めたのである。いずれの場合もカリフの側が屈伏することで事件が終結した。これにより、セルジューク朝のカリフに対する優越

性が、バグダードの民衆の目にも明らかになった意味は大きいといえよう。シャフナとしてのゴウハル・アーイーンの任務は、やはり第一には、カリフに対する影響力の行使だったのである。

なお、イブン・アルアスィールの468/1075-1076年の条には、「この年、スルターン軍の中からは、サアド・アルダウラ・ゴウハル・アーイーンがバグダードにシャフナとして足を印した。アミードのアブー・ナスルがバグダードの徴税 (a'māl) を監督するために同行した」との記述がある⁽⁴⁰⁾。これによれば、すでにこの段階で彼はバグダードのシャフナとなったことになる。しかし、イブン・アルアスィールは、先に述べた471年の条で、より具体的に「イラクのシャフナ職への復帰」として、彼の着任を紹介している。

一方スィフト・ブン・アルジャウズィーは、468年ジュマーダー1月/1075年12月-1076年1月に、ゴウハル・アーイーンが、イブン・ジャヒールの罷免を要求する書簡をもってバグダードに到着したことを記録している。それによれば、この時は、書簡の内容が事実と反するとして、カリフは、罷免の要求を受け入れなかったという⁽⁴¹⁾。双方の史料を見るかぎり、468年段階でゴウハル・アーイーンがバグダードにいたことは明らかである。スィフト・ブン・アルジャウズィーには、さらに同ジュマーダー1月、「シャームのサーヒブでトゥルクマーンのアミール」アトスズが、捕らえたクトルミシュの息子たちを連行したこと、捕虜をゴウハル・アーイーンに引渡したこと、彼らをゴウハル・アーイーンはスルターンのもとに送ったことが記録されている⁽⁴²⁾。したがって、この事件の時点でゴウハル・アーイーンはバグダードに滞在していたことが確認される。ただし、スィフト・ブン・アルジャウズィーは、ゴウハル・アーイーンを、この段階では一切シャフナとは呼んでいない。

カリフの徴税請負人の殺害

次にゴウハル・アーイーンの名が記録に現われるのは、翌471/1078-1079年、彼の郎党の一人 (サーヒブ)、アブー・アルファドゥル・アルトゥルクマーニーなるものが、バスラにおけるカリフのダ

イアの徴税請負人 (dāmin qiyā' al-khalīfa) で、ユダヤ教徒のイブン・アッラーンを殺害し財産を奪った、という事件に関連してである⁽⁴³⁾。この事件は、イブン・アルアスィールと、スィブト・ブン・アルジャウズィーの別の箇所には、472年の事件として記録されている。それによれば、472年ラジャブ月/1080年1月、アフワーズにおもむいたマリク・シャーにフマール・テギーン (Khumār·Tekīn al-Sharābī) とゴウハル・アーイーンとが同行した。スィブト・ブン・アルジャウズィーによれば、マリク・シャーがイブン・アッラーンを捕らえて殺害、財産40万ディーナールを没収、イブン・アルアスィールによれば、フマール・テギーンとゴウハル・アーイーンとが彼の殺害を実行した、とある⁽⁴⁴⁾。

殺害の理由は、イブン・アッラーンが不正を行っていたこと、彼の財力と勢力の増大に対する懸念からであったという。この行為にニザーム・アルムルクは激怒し、3日間館の門を閉めて外出しなかったという。どちらの史料にも、ニザーム・アルムルクとフマール・テギーン、ゴウハル・アーイーンの間には敵対関係 ('adāwāt) があったと記されている。スルターンがニザーム・アルムルクに釈明して、これ以上の進展なく、この事件は終決した。しかし471年のスィブト・ブン・アルジャウズィーの記録から見ると、この事件の背後には、カリフのダイアに対するスルターンの介入という要素が介在していたことがわかる。それゆえ、スルターンは、イブン・アッラーンに好意的だったニザーム・アルムルクの抗議にもかかわらず、2人のアミールを処罰することもなく、事態をおさめることになった。マリク・シャーは、このダイアをフマール・テギーンに年額10万ディーナールと馬100頭の供出という条件で請け負わせることとし、実質的にはカリフからダイアを没収するという成果をあげるのである⁽⁴⁵⁾。

殺害の実行者は、スィブト・ブン・アルジャウズィーの471年の記述から見て、おそらくゴウハル・アーイーンのサーヒブであり、その命令はマリク・シャーから下されていたというのが真相であろう。この事件においても、ゴウハル・アーイーンは、カリフに対するス

ルターンの権限拡大という役割を果たしていたのである。

マイヤーファークの征服

478年ジュマダー2月/1085年10月、カリフの前のワズィール、ファフル・アルダウラは、ディヤールバクル地方、マイヤーファークに遠征した。いくつかの城塞の攻撃には、援軍を率いてゴウハル・アーイーンが加わった。この軍隊はマリク・シャーに属するものであったらしく、守備側の人々は、マリク・シャーの旗印を見て、降伏したという⁽⁴⁶⁾。

遠征軍には、セルジューク朝の主要なアミールが参加していた。スィフト・ブン・アルジャウズィーは、ゴウハル・アーイーンの外に、カラ・テギーン (Qarā-Tekīn), アヌーシュ・テギーン (Anūsh-Tekīn) の名を記録している⁽⁴⁷⁾。

この遠征の後、「ゴウハル・アーイーンはバグダードに戻り、(軍隊の) 主立ったものたちはイスファハーンに行った」とあるところから、ゴウハル・アーイーンは、引き続きバグダードのシャフナ職にとどまったものと考えられる⁽⁴⁸⁾。スィフト・ブン・アルジャウズィーによれば、476年シャアバーン月/1083年12月-1084年1月にも、ゴウハル・アーイーンは、イブン・ジャヒールのディヤールバクル地方遠征を助けるためにバグダードに到着したが、イブン・ジャヒールの反対派から、彼を援助することを非難されて断念し、軍隊を残したまま、ニザーム・アルムルクによってイスファハーンに召喚されてしまったという。シャフナ職にありながら、頻繁にバグダードとマリク・シャーのいるイスファハーンとを往復していたことが窺える記述である⁽⁴⁹⁾。

バグダードの騒乱とマリク・シャーの娘の婚姻

一方、478年には、シャアバーン月、ズー・アルヒッジャ月の2回にわたって (1085年11-12月, 1086年4-5月), バグダードで騒乱事件が起こっている。シャアバーン月の騒乱では、カルフ地区の住民と、スンナ派の地区の住民との間に抗争が起き、イブン・アルアス

イールによれば、ワズイールのアブー・シュジャーが軍隊 (jamā'a min al-jund) を派遣したという。イブン・アルジャウズイーによれば、シャフナが騒ぎがおさまるまで天幕を張って待機したという⁽⁵⁰⁾。

また、イブン・アルジャウズイーによると、ズー・アルヒッジャ月には、カルフ地区の人々とスンナ派の間で抗争が再燃し、カルフ地区とバスラ門地区では放火事件が起きた。このためシャフナが西岸に渡って、バスラ門地区で火を放つという荒療治を行なった⁽⁵¹⁾。これら計3回にわたる、478年の争乱を鎮圧したシャフナの名は記録されていない。

バグダードの騒乱はさらに続いた。479年ムハッラム月/1086年4-5月 (イブン・アルアスィールではサファル月)、スンナ派とシーア派の間に抗争が発生し、マンスール・モスクとアティーカ橋との間で衝突が起き、多数の死者が出た。アミードのカマル・アルムルク・アルディヒスターニーとシャフナ⁽⁵²⁾がカルフ地区の住民を助け、スンナ派を攻撃した。両者は数日間対峙し、勝敗が決しなかった。この際に乗じて、双方のナキーブが税を徴収したので、カリフは彼らを捕らえた。彼らが行為を否認したので、アミードとシャフナは彼らが取ったものを取り戻したが⁽⁵³⁾、さらにシャッワール月にもこの騒乱が再燃したという⁽⁵⁴⁾。

この騒乱の時、ゴウハル・アーイーンがバグダードにいたかどうかは不明である。翌480年ムハッラム月/1087年4-5月には、マリク・シャーの娘とカリフとの結婚のため、婚礼道具がカリフの宮殿に運ばれてきた。その指揮にあたったのがゴウハル・アーイーンとブルスクであったというから、この時にはバグダードに滞在していたことが確認される⁽⁵⁵⁾。この記録も、彼がスルターンとカリフの連絡役として、婚姻という外交上の重要事件に主要な役割を果たしていたことを示すものである。

同480年シャアバーン月/1087年11月には、ゴウハル・アーイーンは、バターイフ (Batāih) のサーヒブ、ムハッズィブ・アルダウラとの戦いのためワースイトへ下っている。彼の不在の間に、バグダ

ードでは騒乱が激化したという⁽⁵⁶⁾。

ゴウハル・アーイーンが、その後、同年ズー・アルカアダ月（1088年7月）にバグダードに滞在していたことは、この月の騒乱事件に際して、彼が鎮圧にあたった記録から確認される。

この時は、カルフ地区とバスラ門地区の住民の間で戦いがあり、アザジュ門地区の住民も、飾り、武器、旗をもってバスラ門地区の人々への応援に駆け付けた。この時、ゴウハル・アーイーンは、彼らがチグリスを渡ることを禁止し、殺し、武器を奪うことによって、騒乱を鎮圧したという⁽⁵⁷⁾。

翌481/1088年の騒乱事件に際しても、ゴウハル・アーイーンは、バグダードにいて、これに対する処置を講じている。この年、サファル月（4-5月）、バスラ門地区の人々が新しい橋を架ける工事をはじめた。金や銀の皿に焼煉瓦を乗せて運び、太鼓、らっぱを手にして行進し、アザジュ門地区をはじめとする方々の街区の人々も加わって、数えきれないほどの人数となった。このさなか、アザジュ門地区のものたちに水瓶を壊され、乱暴されそうになった女が、通りかかったゴウハル・アーイーンに助けを求めたことが、騒動のきっかけとなった。ゴウハル・アーイーンが、彼らをおしとどめ、配下のアトラークたちが、棍棒で彼らに殴りかかったのである。民衆（アーマ）も剣を抜いて応戦し、ゴウハル・アーイーンのサーヒブの中でも特に側近のハージブ、スライマーンを落馬させた。これに激怒したゴウハル・アーイーンは、自ら襲いかかってきた一人の男を槍で突いてチグリスの泥水の中に落とすという武勇まで演じた。ゴウハル・アーイーンは、8人を逮捕し、うち1人を処刑、3人の腿を切るという処罰によって事態をおさめたという⁽⁵⁸⁾。

さらに、翌482年サファル月/1089年4-5月にも、バグダードで騒乱が続いた。バスラ門地区の住民とカルフ地区の住民との抗争で、死傷者が出、カルフ地区ではスークが閉鎖されるという事態となった。この時には、アミードのカマル・アルムルクが収拾にあたり、ゴウハル・アーイーンの名は記録には現われない⁽⁵⁹⁾。

同じく482年ジュマーダー1月/1089年7-8月にも、バグダードで

騒乱事件が発生した。この時のイブン・アルアスィールの記録は、多くの示唆に富む。

事件は、カルフ地区と、その他の地区の住民の間で起こった。双方に死者多数が出て、グッジャージュ運河地区の大部分が他の地区（すなわちスンナ派）のものによって占領され、掠奪、放火されたというものである。この事件の処理にあたったのは、ゴウハル・アーイーンのナリーブであるフマール・テギーンだった。ところが、イブン・アルアスィールは、彼をこの記述のなかで、3回にわたってシャフナと呼んでいるのである。はじめは、彼が事態の収拾に乗り出したことを伝え、「バグダードのシャフナが……それはゴウハル・アーイーンのナリーブのフマール・テギーンであったが……人々に騒乱をやめさせるために、彼の馬と歩兵とともにチグリスの岸でとどまった (fa-nazala shihna Baghdāda wa huwa Khumār · Tekīn al-nā'ib Kauhar · Ā'in)」と述べている。次の二つの箇所では、単に彼をシャフナと呼ぶのみで、名も挙げていない⁽⁶⁰⁾。

したがって、他の騒乱事件の記録においても、ただ「シャフナ」と記されるのみで、ゴウハル・アーイーンの名が書かれていないものについては、別の人物であった可能性があるわけである。シャフナとは、職の名であり、代理のものがついている場合にも、シャフナの行動として記録されたのであろう。しかし、ゴウハル・アーイーンがバグダードの治安維持の最高責任者であったことは、彼が不在中に、バグダードで騒乱事件が激化した、との先の記録からもうかがえるところである。

マリク・シャーの娘の護送

さて、482/1088年には、マリク・シャーは、カリフ・アルムクタディーのもとに書簡を送った。内容は、嫁いでいた娘を呼び戻したいというものだった。理由は、娘とカリフの仲が疎遠になり、マリク・シャーのところに苦情をうったえてきた、というものである。カリフはこの要求を容れ、娘は、カリフとの間にできた子連れで、ラビー1月にバグダードを発った。この時彼女と同行したのが

ゴウハル・アーイーンである。彼は、カリフの主立った従者たちとともに、娘につき従い、(カリフの)ワズィールが、見送りに途中まで随行したという⁽⁶¹⁾。

この記録も、ゴウハル・アーイーンの職務がカリフとスルターンとの間の連絡・調整役であったことを示している。

バスラ出兵の指揮

483年ジュマダー1月/1090年7月、バスラはカルマト派の攻撃を受けた。その知らせがバグダードに届くと、ゴウハル・アーイーンは、サイフ・アルダウラ・サダカ・ブン・マズヤドとともに、鎮圧のためにバスラにおもむいている⁽⁶²⁾。

カリフのワズィールに対する解任要求

484年ラビー1月/1091年4-5月には、再びカリフのワズィールの解任問題が起き、またしてもゴウハル・アーイーンの出番となった。解任されたのは、ワズィールのアブー・シュジャーで、その理由は些細なものであった。マリク・シャーとニザーム・アルムルクのワキールを勤めていたユダヤ教徒のアブー・サアド・ブン・サマハーなるものが、むしろ売りの男に殴打され、ターバンを盗られたというものである。この件を(スルターンの)軍隊の(本陣)に持ち込んで、マリク・シャーとニザーム・アルムルクに苦情をうったえたのが、ゴウハル・アーイーンである。彼は、アブー・サアドに同行を求め、この事件をワズィールの責任であると主張した。バグダードにおける公衆道徳の維持は、カリフのワズィールの職務であるという論理である。そこで、カリフ・アルムクタディーにアブー・シュジャー解任を要求する使節が派遣され、カリフもこれを受け入れざるを得なくなった。アブー・シュジャーを支持する民衆が集まり、不穏な情勢となったため、彼は外出を禁止されるという事態となった。結局、後任にはカリフが推した、前ワズィールのアミード・アルダウラがズー・アルヒジャ月(12月)に復帰することとなって、事件は落着いたという⁽⁶³⁾。

この騒動の背景には、カリフが一方的にアミード・アルダウラを解任してアブー・シュジャーを登用したことに對するニザーム・アルムルクの反発があった。この経緯を見ると、スルターンとニザーム・アルムルクは、カリフのワズィール任免に強い影響力をもち、バグダードの状況を報告するゴウハル・アーイーンの発言が重視されていたことが理解される。今まで見てきた事件を振り返ってみると、カリフのワズィール任免にあたっては、常にゴウハル・アーイーンが介入していたことになる。

ヒジャーズ・イエメン遠征

485/1092-1093年、バグダードに滞在中のマリク・シャーは、カルミーシーンのサーヒブでトゥルクマーンのアミール、チャバク (Jabaq) に、スルターンのアミールたちの集団 (jamā'a min umarā' al-sultān) とともに、ヒジャーズ、イエメンへ行くよう命じた。その諸地方の征服を直接命じられたのは、ゴウハル・アーイーンだった。ゴウハル・アーイーンは、トゥルシュク (Turshk) なるアミールをアーミル ('āmil) に任命している⁽⁶⁴⁾。

内部抗争への関与と三回目のバグダードのシャフナ職就任

485/1092年、マリク・シャーが没すると、後継者の地位をめぐる、セルジューク朝の内部紛争が起こった。マリク・シャーの妻トルカン・ハトン、ホラーサーンに拠ったアルスラーン・アルグン、それにトゥトゥシュとバルキヤールクとの四つ巴の争いである。前二者は、まもなく世を去り (487/1094年, 490/1097年)、あとの両者の対立が深刻となった。ゴウハル・アーイーンも、そのなかであって、身の処し方に苦慮することとなった。

486年ラビー1月/1093年3月、モスルに続いてマイヤーファールキーン、ディヤールバクル地方を領有したトゥトゥシュは、アゼルバイジャンに兵を進め、レイ、ハマダーンを支配下に置いたバルキヤールクに対決を挑んだ。しかし、軍隊のなかのアミールたち、カスィーム・アルダウラ・アク・スングルとブーザーンが、彼のもと

を去ってバルキヤールク側に走ったため、シリアに帰らざるを得なくなったという⁽⁶⁵⁾。

これより先、ゴウハル・アーイーンは、バグダードにあってトゥ・トゥシュの支持を明らかにし、その名をフトバで唱えさせることに尽力していた。そのため彼は、苦境に立つことになった。彼は、バルキヤールクの軍隊の（宿营地）を訪ねて、釈明した⁽⁶⁶⁾。ブルスク⁽⁶⁷⁾、グムシュ・テギーン・アルジャーンドールというアミールたちが、彼を支持して味方についたため、彼はイクターを没収されるという条件で許され、バグダードのシャフナ職に再びつけられることになった。しかし、これを機に、彼のもとからは、サーヒブたちが離反してしまったという⁽⁶⁸⁾。

この時没収されたイクターは、彼が領有していたすべてのものではなかったようだ。バルキヤールクは、没収したイクターをアミールのヤルバド（Yalbad）のイクター増額にあてたというが⁽⁶⁹⁾、同年ラマダーン月にヤルバドを処刑し、その割り当て分を元に戻すことによって、ゴウハル・アーイーンの「イクターを増額した」からである⁽⁷⁰⁾。

この時には、シャフナ職の俸給も増額されたとしく、イブン・アルアスィールでは、「バルキヤールクは、ゴウハル・アーイーンのイクターと、バグダードのシャフナ職（の給与）を増額した」と述べられている⁽⁷¹⁾。

イクター保有

ここで、ゴウハル・アーイーンが保有していたイクターについて見てみよう。

ゴウハル・アーイーンの保有していたイクターについては、後藤氏が指摘しているように、アルブ・アルスラーンより授与されたワースイトがあった⁽⁷²⁾。このほか、彼はトルカン・ハトンからタクリートの統治を任せられている⁽⁷³⁾。タクリートは、マリク・シャーの死後、アク・スングルが領有し（malakahā）、彼の死後はグムシュ・テギーンが代理のものを置いて統治していた。次にゴウハル・アー

イーンが、イクターとして保有することとなったという⁽⁷⁴⁾。

再びバグダードの騒乱

486年ジュマーダー2月/1093年6-7月、再任まもないゴウハル・アーイーンが出馬する事件が起こった。再び、バグダードに騒乱事件が発生したのである。事は、西岸で起きた。イブン・アルジャウズイーによれば、繁華な通りが寸断され、ナスリーヤ地区では、殺人事件も発生した。ゴウハル・アーイーンは、解決のため、朗党たちを派遣した。彼らはナスリーヤ地区に放火し、腐敗したもの(mufassidīn「アイヤールたち」を意味するものか)を追放した。騒ぎは、バスラ門地区とカルフ地区との抗争に発展し、新しい橋のところで殺人も起こった。ゴウハル・アーイーンは、ここにも部隊を投入し、掠奪や放火が起きたという⁽⁷⁵⁾。イブン・アルアスィールによれば、アミードのアブー・マハースィン・アルディヒスターニーが、騒乱鎮圧に功績があったという⁽⁷⁶⁾。

バルキヤールクの名がフトバで公式に唱えられたのは、翌487年のムハッラム月(1094年2月)であった。ゴウハル・アーイーンの着任は、それよりも少なくとも7ヶ月以上前であったことになる。今回のスルターン即位の公認については、ゴウハル・アーイーンがなんらかの働きをしたという記録は残っていない⁽⁷⁷⁾。

トゥトゥシュのシャフナ

一方、488年サファル月/1095年2-3月には、トゥトゥシュが、カリフとの交渉の目的で、配下のトゥルクマーンのアミール、ユースフ・ブン・アーバク(Yūsuf b. Ābaq)を派遣し、諸地方のフトバで名を唱えさせるように折衝させることを意図した。しかし、ユースフはバグダードに入ることが出来ず、引き上げている。イブン・アルアスィールは、彼をシャフナと呼ぶ⁽⁷⁸⁾。つまり、トゥトゥシュも、ゴウハル・アーイーンとは別にシャフナを任命していたことになる。この場合にも、シャフナの任務は、カリフとの交渉であった。

十字軍とゴウハル・アーイーン

セルジューク朝の内部抗争が続く間に、時代は移り、西方の領土には十字軍の侵攻の波が迫った。491年ラビー 2 月/1097年 3 月、バグダードにはスルターン、バルキヤールクがアミールたちにあてた、カリフのワズィール、イブン・ジャヒールとともに十字軍との戦いにおもむくよう命令した書簡が届いた。そこで、彼らはバイト・アルヌーバに集まり、サイフ・アルダウラ・サダカがアンバールの近くに陣を、ゴウハル・アーイーンは、西岸に陣を張ったが、その決意はさめてしまい、そのままになってしまったという。その後アミールたちが無為に時を過ごすうちに、十字軍のアンチオキア征服、マアッラ・アルヌウマーン包囲と虐殺、掠奪、イェルサレムにおける 7 万人の虐殺の知らせが届いたという⁽⁷⁹⁾。

491年段階でも、ゴウハル・アーイーンはバグダードにとどまっており、しかもスルターンの軍隊のなかでも、なおも有力なアミールであったことを示す記録である。

フトバでの支配者名公示の変転と彼の日和見的行動

当時、十字軍の侵入という事態を前にして、なおもセルジューク朝の内部抗争は続いていた。翌492年ズー・アルヒッジャ月/1099年 10-11月には、一転して、バグダードのフトバでは、ムハンマドの名が読み上げられることになったのである。

この時には、ムハンマド軍の形勢が良くなったため、バグダードから、ゴウハル・アーイーンが彼のもとに走った。ゴウハル・アーイーンが「バルキヤールクの下で疎外されていた」ことが、彼の行動の背景にあったという。ゴウハル・アーイーンには、他の有力なアミールも加わった。モスルのサーヒブ、キュルブガ (Kurbūqā), ジャズィーラのサーヒブ、チュカルミシュ (Jukarmish), キンカワルのサーヒブ、スルハーブ (Surkhāb) などである。彼らは、ムハンマド軍に合流したが、ゴウハル・アーイーンはバグダードに戻った。カリフにムハンマドの名をフトバで唱えさせるためである。彼

の努力によって、フトバで名が唱えられ、ムハンマドにラカブも贈られることになったという⁽⁸⁰⁾。

ここでも、ゴウハル・アーイーンの役割は、カリフとの連絡役であったことが注目されよう。しかし、状況は流動的であった。翌493/1100年には、再びバルキヤールクの名がフトバで唱えられることになったのである。

前年、イナール・ブン・アヌーシュ・テギーンらのアミールを伴い、レイからフーズィスターンに移動したバルキヤールクは、ワースィトにおける反乱を鎮圧、サファル月（12月）にバグダードに入った。その二日前にフトバで、彼の名が唱えられたという⁽⁸¹⁾。

この時のフトバでの名の公示についてのカリフとの交渉には、ゴウハル・アーイーンは関与していない。彼は、ムハンマドを支持してイルガーズィー・ブン・アルトゥックをはじめとするアミールたちに、ハマダーン近くのダーイ・マルグ（Dāi・marj）に行き、ムハンマドと行動をとともにするよう呼びかけた。キュルブガ、チュカルミシュにも集結を呼びかけ、活発な活動を展開した。しかし、チュカルミシュが翻意したため、残ったアミールたちの合議によって、バルキヤールクを支持することに方針を変更し、彼を呼び寄せることにした。これを受けてバルキヤールクは、ゴウハル・アーイーンらの軍隊に合流するため、いったんダーイ・マルグまで出陣し、バグダードへ帰るという手順を踏むことになった⁽⁸²⁾。

この時点では、セルジューク朝のスルターン位継承をめぐる抗争の主導権は、有力アミールの手に移り、彼らが君主を選定して擁立するという事態となっていたことが読み取れるのである。その中でも中心となっていたのがゴウハル・アーイーンであったことは注目に値する。バグダードに戻ったバルキヤールクは、カリフのワズィールを更迭し、カリフからヒルアを受けているが⁽⁸³⁾、この交渉にゴウハル・アーイーンがあたったかどうかについては記録はない。

セフィードルードの合戦

同493年ラジャブ月/1100年5月、セルジューク朝の支配権をめぐ

って、バルキヤールクとムハンマドとの間で雌雄を決する戦いが行われた。これが、セフィードルードの合戦である⁽⁸⁴⁾。

この戦いでは、ムハンマドは、2万人の軍隊を動員した。彼はアミール、スィルミズとともに、中央に陣取り、右翼をアミール・アフール (amīr-ākhur) のイナンチ・ヤブクと息子のアヤーズ (Ayāz) が、左翼をムワイイッド・アルムルクとニザーミーヤ (Nizāmīya)⁽⁸⁵⁾がかためていた。

これに対するスルターン・バルキヤールク軍では、彼自身とワズィールのアアズ・アブー・アルマハーシンが中央に、右翼にゴウハル・アーイーーンとイZZ・アルダウラ・ブン・サダカ・ブン・マズヤド、スルハープ・ブン・バドルが、左翼にはキュルブガがあたっていた。

この戦いでは、ゴウハル・アーイーーンは大いに奮戦し、敵の左翼、ムワイイッド・アルムルクとニザーミーヤの軍とを敗走させた。しかし、バルキヤールク軍の左翼がくずれたため、形成は不利となり、ゴウハル・アーイーーンも敵を追撃するのを断念して帰還せざるを得なくなった。その時、彼の乗馬が傾き、彼は地上に投げ落とされてしまった。そこへ、ホラーサーン出身の敵兵 (Khurāsānī) が来合せ、彼を殺害し、首級を奪ってしまったという⁽⁸⁶⁾。一方、イブン・アルジャウズィーは、彼は落馬した際に、自らの武器によって傷ついて死んだとしている⁽⁸⁷⁾。これを機にバルキヤールク軍は総崩れとなり、50騎を残すのみという大敗を喫してしまったという⁽⁸⁸⁾。

むすび

その後、彼の遺骸はバグダードに運ばれ、町の東部 (jānib al-sharqī) に埋葬された。彼の墓廟 (turba) は、アブー・マンジープの宿 (ribāṭ) の向かいにあったという⁽⁸⁹⁾。

彼の享年は、不明である。アブー・カーリジャールとともにバグダードに来たのが436/1044年である。それ以前にすでに別の主人に仕えていたということから、少なくとも、死亡したときには70歳は

過ぎていたことであろう。

彼の一生は、常にセルジューク朝の歴史の第一線にあった。マラーズギルドの合戦からセフィードルードの合戦にいたる6回の戦いに参加し、その中でも変わらずに中心的な役割を演じていた。また、バグダードにあって、度重なる都市の争乱を、過剰ともいえる峻厳さで鎮圧し、治安の維持に努めていた。

彼の面目が遺憾なく発揮されたのは、カリフとの交渉の局面だった。スルターンの意を体して、演技とも思えるような思い切った手段を使い、カリフに圧力を加え続けたのである。史料の記述からは、まさに「セルジューク朝の大久保彦左衛門」とでもいうべき人物像が浮かび上がってくる。

彼の行動からは、バグダードのシャフナ職の任務が、治安の維持ばかりでなく、カリフとの交渉、カリフの行動の統制にあったことが理解されるであろう。

ゴウハル・アーイーンは、そのほか、スルターンの娘の婚姻、別居、一族の重要人物の処刑という、王朝内部の極めて重要な事件にも関与していた。別の王朝のもとから転じた一人のmamulukに、これほどの重責が課せられていたことは驚きに値する。mamulukのアミールの力が増大し続けたことは、スルターン位の継承すらも、彼らの主導によってなされるに至ったことに、よく表わされている。

セルジューク朝には、彼をはじめとする多くのアミールが存在し、さまざまな局面で重要な役割を果たしていた。今後、彼ら一人ひとりの出身、経歴、行動、君主との関係、イクターの保有、官職などの要素を個々に明らかにしていくことによって、王朝の構造、性格がより鮮明に理解されるようになることと考えられる。本稿は、その序論である。

註

- (1) アラビア語では、カウハル・アーイーン (Kauhar·Ā'in)。本稿では、ペルシア語の発音で統一する。

- (2) I.J. XVII. p. 56.
- (3) I.A.X. p. 292.
- (4) Bundārī. p. 66. 刊本では、一部省略されているところがある。トルコ語訳本は写本にある箇所をそのまま伝えている。Tr. K. Burslan. *Irak ve Horasan Selçukluları Tarihi*. İstanbul, 1934. pp. 65-66.
- (5) いまのところ、セルジューク朝のアミールについての個別研究としては、以下のものがある。
 Merçil, E. “Emîr Savtegin.” *Tarih Enstitüsü Dergisi*, VI, pp. 63-74.;
 Ory, S. “De quelques personnages portant le nom de Kumštakin a l’époque Salğūqide.” *Revue des études Islamiques*. XXXV, 1967. pp. 119-134. (この時代の何人かの “Kumštakin” を時代別に整理して特定したもの) ; Sevim, A. *Ünlü Selçuklu komutanları. Atsız, Artuk ve Aksungur*. Ankara, 1990. 後述するマラーズギルドの合戦に参加したアミールについては, Sümer, F. “Malazgirt savaşına katılan Türk beyleri.” *Selçuklu Araştırmaları Dergisi*, IV, 1971, pp. 197-207. がある。
- (6) I.A.X. pp. 295-296.
- (7) J.J. XVII. p. 56.
- (8) I.J. XVII. p. 56.
- (9) Bayhaqī. pp. 163, 373, 433, 805.
- (10) Mir’at. p. 149.
- (11) I.J. XVI. p. 125.
- (12) I.A.X. p. 66.
- (13) Bundārī. p. 41.
- (14) Rawandī. p. 119. Saljūq-nāma も同様の逸話を伝えるが、スルターの発言として、ゴウハル・アーイーンの名は記録されていない。Saljūq-nāma. p. 25.
- (15) アラビア語ではシフナというが、本稿ではペルシア語の表記にならって、シャフナとする。シャフナについては、後藤敦子「セルジューク朝時代のシフナ職—バグダードを中心に—」『イスラム世界』39・40, 1992年, 23-39頁。Lambton, A.K.S. “The Administration of Sanjar’s Empire as illustrated in the ‘Atabat al-Kataba.” B.S.O.A.S., XX, 1957, pp. 367-388.; do. “The internal Structure of the Saljuq Empire.” *Cambridge History of Iran*, V, Cambridge, 1968, pp. 244-255, 280.; Horst, H. *Die Staatsverwaltung der Grosselgügen und Hōrazumšās*. Wiesbaden, 1964, SS. 93-96. を参照。

- (16) I.A.X. p. 70.;
- (17) I.A.X. p. 70.; I.J. XVI. p. 138.
- (18) I.J. XVI. p. 106.; Bundārī. p. 42.
- (19) Mir'āt. pp. 155-156.
- (20) I.J. XVI. p. 144.
- (21) I.A.X. p. 73.
- (22) Mir'āt. p. 165.; Bundārī. p. 44.; Akhbār. p. 54.
- (23) Rāwandī. p. 121.
- (24) I.A.X. p. 79.
- (25) Bundārī. p. 46.
- (26) Mir'āt. p. 163.
- (27) トルコ系王朝にあっては、支配者一族の血を流すことはタブーとして忌み嫌われていた。Köprülü, F. "Türk ve Moğol şulâlelerinde hanedan azasını idamında kan dokme memnuniyeti." *Türk Hukuk Tarihi Dergisi*, I, 1944, pp. 1-9. トグルル・ベクに対して反乱を起こしたイブラーヒーム・イナールの処刑も、同様の方法によるものであった。また、処刑にあたったのも、グラームのフマー・テギーンであった。拙稿「イブラーヒーム・イナールとイナリヤーン——大セルジューク朝初期の Turkman 集団——」『イスラム世界』10, 1975年, 27頁。
- (28) イブン・アルジャウズイーは al-'ahd al-manshā' li-salṭana とする。I.J. XVI. p. 154.
- (29) I.A. X. p. 90.
- (30) Mir'āt. p. 167.
- (31) I.J. XVI. p. 145.
- (32) I.J. XVI. pp. 145-147.; 後藤, 前掲論文, 27頁。
- (33) I.J. XVI. p. 157.; 後藤, 前掲論文, 27頁。
- (34) I.A. X. p. 107. イブン・アルジャウズイーが伝える事件(ラビー1月)と同一の事件であれば, 1077年に起こったことということになる。I.J. XVI. p. 190.
- (35) I.A. X. p. 110. 471年の条。月名の記載はない。
- (36) Mir'āt. p. 195.
- (37) スィフト・ブン・アルジャウズイーによればターク門であった。Mir'āt. p. 195.
- (38) Bundārī. pp. 50-51.; I.J. XVI. p. 198.; Mir'āt. p. 195.
- (39) Bundārī. p. 51.
- (40) I.A. X. p. 100.

- (41) カーヴルト・ベクが、カリフの信任を得ようとして贈った、30万デ
ィーナールについての疑惑で、イブン・ジャヒール本人は、これを根拠
なきものとした。Mir'āt. p. 177.
- (42) Mir'āt. p. 178.
- (43) Mir'āt. pp. 199-200.
- (44) I.A. X. p. 116. ; Mir'āt. pp. 201-202.
- (45) I.A. X. p. 116.
- (46) I.A. X. p. 144. ; Mir'āt. p. 236.
- (47) Mir'āt. p. 236.
- (48) I.A. X. p. 144.
- (49) Mir'āt. p. 225.
- (50) I.A. X. p. 145. ; I.J. XVI. p. 241. ; 後藤, 前掲論文, 28頁。
- (51) I.J. XVI. p. 242.
- (52) イブン・アルアスィールには記載がない。イブン・アルジャウズィ
ーも、シャフナというだけで、名は記していない。I.J. XVI. p. 256.
- (53) I.J. XVI. p. 256.
- (54) I.A. X. p. 157.
- (55) I.A. X. p. 160.
- (56) I.A. X. pp. 162,435.
- (57) I.J. XVI. p. 270. ; 後藤, 前掲論文28頁。
- (58) I.A. X. p. 164. ; I.J. XVI. p. 277.
- (59) I.A. X. p. 171.
- (60) I.A. X. pp. 176-177. イブン・アルジャウズィーの記述は、イブン・
アルアスィールに見えるサファル月の事件と、ジュマーダー 1 月の事
件とが一つのものとして構成されている。I.J. XVI. pp. 281-282. ; 後
藤, 前掲論文, 28-29頁。
- (61) I.A. X. p. 175.
- (62) I.A. X. p. 184.
- (63) I.A. X. p. 187.
- (64) I.A. X. p. 204. ; Akhbār. p. 72.
- (65) I.A. X. pp. 222.
- (66) I.A. X. p. 221-222.
- (67) 彼の没年は、490/1097年であった。I.A. X. p.271.
- (68) I.A. X. p. 222.
- (69) I.A. X. p. 222.
- (70) I.A. X. p. 226.

- (71) I.A. X. p. 226.
- (72) I.A. X. p. 296.; 後藤, 前掲論文, 32頁。
- (73) I.A. X. p. 420.
- (74) I.A. X. p. 420.
- (75) I.J. XVII. p. 5.
- (76) I.A. X. p. 226.
- (77) I.A. X. p. 229.
- (78) I.A. X. p. 244.; I.J. XVII. p. 15.
- (79) I.J. XVII. p. 43.
- (80) I.A. X. p. 289.
- (81) I.A. X. p. 293.
- (82) I.A. X. pp. 293-294.
- (83) I.A. X. p. 294.
- (84) イブン・アルアスィールには Isbidhrūd̄h とある。
- (85) ニザーミーヤは, ニザーム・アルムルクの私兵集団が, 彼の死後も
残って勢力を保持していたものである。
- (86) I.A. X. pp. 294-295.
- (87) I.J. XVI. p. 57.
- (88) I.A. X. pp. 294-295.